

1. 京都市東山・三嶋神社 文書調査と地域の文化財

水谷 友紀

1. 『京都東山・三嶋神社文書調査報告』の刊行

京都府立大学文化遺産叢書第 18 集『京都東山・三嶋神社文書調査報告』は、科学研究費補助金（基盤研究（B））「聖地・霊場の成立についての分野横断的比較研究」（研究代表：菱田哲郎、JSPS KAKENHI 18H00741）の成果として 2019 年 12 月に刊行された。報告書の構成は、2019 年 6 月に実施した研究会での報告を土台に執筆された論考編と、祭礼調査の記録の祭礼編、古文書目録の目録編の全 3 編からなる。京都東山という狭い地域を拠点としながら、時代・分野の幅広く、奥行きある内容となった。

2. 調査の経緯

三嶋神社は山城国愛宕郡、現在の京都市東山区渋谷通上馬町に位置する。清水寺の南、京都国立博物館や妙法院の東、京都女子学園の北という、観光地・大寺院・文教施設に囲まれた立地となっている。社伝などによると、後白河天皇の中宮建春門院平滋子が、摂津国嶋下郡（現在の大阪府高槻市）の三嶋神社に祈願したところ、高倉天皇を出産した。このことから、1160 年（永暦元）9 月、平重盛に命じて、現地に社殿を造営し勧請したことが当神社創建の由緒となっている。また、ウナギを神使とすることで知られている。

本報告書刊行にいたる調査の開始は 2013 年頃である。ただし、着手は 1998～1999 年頃、三嶋神社の依頼により、京都女子大学古文書研究会がおこなった古文書調査であった。筆者も当時学生としてこの研究会に参加した。この調査体制は数年間続いたがその後中断した。

2013 年頃、京都府立大学に調査基盤を移し、新たな体制となった。前回の調査から 10 年以上経過したこともあり、所蔵者である三嶋神社友田重臣宮司とも連絡を保ちつつ、調査を一からやり直した。古文書 1 点ごとに付番、デジタルカメラ撮影、データをパソコンに入力し目録作成を実施した。古文書の総点数は約 2000 点である。この作業におおむね 1～2 年の時間を要した。これに平行して東昇と相談しつつ、報告書刊行を模索していった。三嶋神社に伝来した種々の文化財の特性に鑑み、梅田千尋氏（京都女子大学文学部教授）、児島大輔氏（大阪市立美術館学芸員）、萩原大輔氏（富山市郷土博物館主任学芸員）への研究協力依頼をおこない、快諾を得た。このようにして徐々に新たな調査研究体制ができあがっていった。

祭礼調査報告を添えたことも本書の特色の一つである。報告内容は三嶋神社で 9 月に斎行されている神幸祭の準備や当日の様子が中心となったが、調査自体は氏子崇敬者の方が参列されるものに絞って 1 年間密着しておこなった。また、近世に三嶋神社神主が神楽を伝授したという由緒がある常陸国の小栗内外大神宮（現在の茨城県筑西市）に赴き、社殿や神楽を見学した。

見学にあたっては、筑西市教育委員会に種々ご配慮いただいた。現在、三嶋神社にこの神楽は伝わっていないが、小栗内外大神宮には神楽伝授の古文書が残っている。

3. 2018～2019年度の研究活動

2019年6月、京都府立大学附属図書館にて研究会を開催し、所蔵者や京都府立大学の学生をはじめ約20名の参加があった。当日の発表内容概要は次の通りである（当日報告順、敬称略）。三嶋神社文書調査の経緯と概要の説明（水谷友紀）、近世三嶋神社の信仰について、中宮・女御と安産祈願や豊後森藩主久留嶋氏の参詣、京都代官小堀氏の寄附、妙見信仰の講など、幅広い信仰の実態の報告（東昇）、近世三嶋社と神職組織について、妙法院門跡や白川家との関係、周辺諸社との神職ネットワークを中心に考察した報告（梅田千尋）、そして、三嶋神社に伝来した中世文書については、三嶋神社摂社妙見宮の妙見神像との関連が検討された。その内容は、南北朝期の足利將軍による天下静謐祈祷、戦国期、大内氏による社領等寄進の実態、毛利氏の支援などについての報告（萩原大輔）、神像については、三嶋神社妙見神像の概要が述べられ、豊富な類例を提示し、像容が中国の道教神・真武大帝に通じるとする特徴の指摘があった（児島大輔）。このように、中世史・近世史・美術史といった多方面から、三嶋神社の歴史、文化財、信仰等について輪郭を描くことができた。

なお、研究会に先立ち、2018～2019年度には、神像調査、現地見学も実施した。神像調査では三嶋神社咲耶会の皆さまはじめ、多くの方々に御世話になった。現地見学では、三嶋神社、瀧尾神社（東山区）、若宮八幡宮社（同区）、音羽川旧流路など、関係史跡を見て歩いた。

4. 地域の文化財と研究成果の活用

地域には、その地域で培われた文化や知恵、様々なひとの暮らし、つまり“地域が歩んできた人生”そのものがつまっている。それは一見してわかりやすいものもあれば、目をこらさないとよくみえないものもある。知らぬうちに生活の一部になっているようなものもある。私たちは“地域が歩んできた人生”を知ることによって、それがどのようなものか、気づき、思考を深めるチャンスが得られる。浅学ながら、筆者はこのように考えている。今回の報告書が研究者はもとより、所蔵者をはじめ、日頃お祭りや様々な行事に奉仕されている地域の皆さまなど、多くのかたにご覧いただき、今後、成果を活用していただければと願っている。

なお刊行にあたっては、東昇氏をはじめ、梅田千尋氏、児島大輔氏、萩原大輔氏には、各専門分野から丹念な分析・考察、適切な助言をいただいた。皆さまに御礼を申し上げたい。最後に、長期間におよぶ調査研究にご協力くださった三嶋神社友田重臣宮司に、改めて深く感謝する次第である。